

体系的知識と断片の美学

―谷崎潤一郎「痴人の愛」論

グレゴリー・ケズナジャツト

一 「痴人の愛」における〈西洋〉

「痴人の愛」(大阪朝日新聞)一九二四年三月二〇日―六月四日、「女性」一九二四年一月―一九二五年七月)は、谷崎潤一郎の〈西洋崇拜〉の「頂点」と言われてきた作品である。本論でこの評価の意味と、この評価が先行研究にもたらした影響を考察する。作中における英語教育の場面を取り上げ、中村光夫などの評論家が示す〈西洋〉に対する〈理解〉の形と、作品に書き込まれた〈理解〉のまた別の形の比較を試みる。

以下に示すように、「痴人の愛」においては体系的な〈知識〉と、そういう知識の在り方に当て嵌らない断片的なものとの間の緊張感が常に働いている。たとえて言うと、譲治がナオミに渡す教科書に書かれた、文法的に正しい英語がある一方で、後

のダンス練習の場面に飛び交う、文法的には不正解だがコミュニケーションの手段として有用に機能する別種の英語も作中に書き込まれている。中村光夫の評論をはじめとして、谷崎に関する論考によく見られる括弧付きの〈西洋〉の概念は前者に当て嵌まるとすれば、「痴人の愛」に描かれている、完全なる〈西洋〉ではなく、中途半端な西洋化や、片言の英語の台詞などはおそらく後者に入ると言えよう。これはまた物語の内容レベルにも現れる。たとえば譲治が英語教育に対して示す考え方と、ナオミのそれとの間に、同じ関係が立ち上がる。そして、最後に、譲治のナオミに対する見方に関連して同じ関係が物語の文体にも現れる。本論でこの三つの側面に関して考察する。

「痴人の愛」は冒頭から国際的な関係を明示的に課題として取り上げている。

殊に此の頃のやうに日本もだん／＼国際的に顔が広くなつて来て、内地人と外国人とが盛んに交際する、いろんな主義やら思想やらが這入つて来る、男は勿論女もどし／＼ハイカラになる、と云ふやうな時勢になつて来ると、今まではあまり類例のなかつた私たちの如き夫婦関係も、追ひ／＼諸方に生じるだらうと思はれますから。(三頁)

様々な要素が混じりつつある当時の環境に河合讓治が書く手記は参考となるということである。しかし谷崎評論と研究は、早い段階でこの小説を谷崎の「西洋崇拜」の表現として位置した。中村光夫はその代表的な評価を下している。中村によると、谷崎の西洋に対する理解は「はなはだ一面的であつたので、僕等はその例証を、彼の前半期の代表作であり、彼の西洋崇拜の頂点といふべき、「痴人の愛」に見ることができます」ということである。⁽¹⁾

一九七六年の論考で駒尺喜美は中村の指摘の重要性に触れている。「谷崎の半生を貫いた西洋崇拜の結晶であり、西洋が肉体化されていると評価しつつも、その西洋はいかにも浅薄であるとする中村光夫」の意見は「痴人の愛」論の一本の重要軸となつているという。この意見は中村に限られたものではない。たとえば一九五七年に谷田昌平は「痴人の愛」を「震災頃までの谷崎の西洋崇拜の総決算とも言うべき作品」と名付けている。⁽²⁾中村の意見は五〇、六〇年代にわたつて様々な論考に受け継がれてきたが、七〇年代に入ってから、それに対する批判的な

発言も現れ始める。たとえば松本鶴雄は、次の評価を下す。

この際、中村の言う「西洋」が谷崎にとつて一面的で、皮相で、外形だけであつたかどうか、さして問題ではない。田山花袋の『蒲団』の時も『風俗小説論』そうであつたが中村の言うところの、本当の「西洋」とは一体なんであるのか、それなしでは日本の近代文学が間違っているかのような言い方にこそ問題はあつたのだが、それはこの小論の埒外になるので、捨て置くとして、確かに『痴人の愛』が「彼の西洋崇拜の頂点」であるという認識は首肯すべきであらう。いや、頂点と言うよりは総決算といったほうが適切かもしれない。⁽³⁾

松本は中村が想定する「本当の「西洋」」に対して疑いを示しつつも、最終的には中村の論点を肯定的に捉えている。ただ、「痴人の愛」における「西洋」像に批判性がある可能性も認めている。

他にも、前田久徳は「痴人の愛」について「よく知られているように、これを書く頃の谷崎は、熱烈に西洋崇拜熱に取り憑かれていた」とする。山口政幸は「痴人の愛」における「西洋」と後のいわゆる「古典回帰」を結びつける。

谷崎の古典回帰とは、その意味で、「西洋」が発見していったひとつの可能性であつたと言えるかもしれない。「西洋」は、それ自体の形質をいったんは消失しながら、ひとつの豊かさへの憧憬として、それに見合う別の美しい対象を選

びとっていくと言えるだろう。それが谷崎の場合関西という（第二の故郷）であつたのだが、こうした軌跡は、単に谷崎のみではない、所謂帰郷を果たした作家たちに共通したひとつの心的軌跡だつたと言えるだろう。西洋は、その可能性の果てに、また新たな可能性を呈示するのである。『痴人の愛』の西洋は、他ならぬ『痴人の愛』の「西洋」によって、やがて捨てられていくのである。

以上の論に見られるように、バリエーションはありながらも「西洋」を中心に「痴人の愛」を論じる研究は多くなされてきた。ただ、谷崎の「西洋」観が「浅薄」であるとすれば、それは「浅薄」でない描き方、つまり「西洋」の本質を現す描き方が存在する、という前提の上に立つ主張であると言える。本論では、この本質主義的な捉え方に対する批判性が「痴人の愛」に書き込まれている可能性を提示したい。そのためにまずはナオミの英語教育を考察する。

二 ナオミの英語教育と〈西洋〉との接し方

「どうだね、ナオミちゃん、ほんたうにお前、学問をした
い気があるかね。あるなら僕が習わせて上げてもらい、けれ
ど」

それでも彼女が黙つてゐますから、私は今度は慰めるやう
な口調で云ひました。

「え？ ナオミちゃん、黙つてゐないで何とかお云ひよ。」

お前は何をやりたいんだい。何が習つて見たいんだい？」
「あたし、英語が習ひたいわ」

「ふん、英語と、——それだけ？」

「それから音楽もやつてみたいの」（一五頁）

ここのやりとりでわかるように、ナオミは最初から英語を学ぶ意欲を示す。さらに、彼女は花の英語での呼び方を沢山知っているように書かれている。「花の話で想ひ出すのは、彼女が大変西洋花を愛してゐて、私などにはよく分らないいろいろ花の名前——それも面倒な英語の名前を沢山知つてゐたことでした」（一九頁）。

しかしナオミは名詞を集めることができるのに、文法を覚えるのは苦手のようである。譲治がナオミの英語学習について彼女の先生に当たるハリソン婦人と話している場面を考えよう。譲治はナオミが文法を覚えられないことについて不安を示すと、ハリソンは「い、え、そんなことはありません、あの児はなかなか賢い児です。よく出来ます」と答える（四九頁）。ハリソンは更に次のように敷衍する。

「日本の人、みな文法やトランスレーションを考へます。けれどもそれは一番悪い。あなた英語を習ひます時、決して／＼頭の中で文法を考へてはいけません、トランスレーションしてはいけません。英語のまゝで何度も／＼読んで見ること、それが一等よろしいです。ナオミさんは大変発音が美しい。そしてリーディングが上手ですから、今にき

つと巧くなります」

そう言われても不満である譲治は、英語学習と、文法をバズルのように解く能力を繋げる。そして、ハリソンがナオミの英語に納得していることも、彼女の発音に騙されているからだとする。「それで恐らくハリソン嬢はその声に欺かされて、コロリと参つてしまつたに違ひないのです」と言う。しかし譲治はむしろこの状況を喜ばしく思っているようである。

私は内心嬢の意見や教授法に対して甚だ不満でしたけれども、同時に又、西洋人がナオミをそんなにひいきにしてくれる、賢い児だと云つてくれるのが、自分の思ふ壺なので、恰も自分が褒められたやうな嬉しさを禁じ得ませんでした。ここで注目したいのは、この会話は英語ではなく、日本語で行われていることである。ハリソンのやや片言の日本語と、それに合わせる譲治の翻訳調っぽい日本語がこの点を強調する。つまり、譲治は英語の母語話者に対して英語で話さない、あるいは話すことを躊躇するのに、ナオミより、ひいてはおそらくハリソンより英語がわかるという自負を持っている。なぜなら譲治にとつては英語はコミュニケーションツールなどではなく、体系的な知識であるからである。たとえば譲治は、ナオミが英語の文典を理解していないのは、「組織の才がなく、分析の能力がない」(五三頁)からだとする。

日高佳紀は既にこの点を指摘している。「ここには、譲治がナオミに期待している「学問」の質が明確に示されている。実

際に身につけた知識が「実用」的かどうかということよりも、「学問」を通して「組織の才」とか「分析の能力」といったものを身につけるべきだと考えているのである」。

次にナオミが使っている教科書を見てみたい。「The English Echo」はいわゆるリーダーであり、ナオミが上手く読めると言われているのであるが、テキストの序章に説明されている通り、この本に載っている文章は単なる読み物ではなく、対話であることがわかる。

What flowers are these? They are roses. O yes: red roses. The rose is a very pretty flower. Yes, it is very pretty. It has a sweet smell, has it not? Yes, the odor is quite sweet. There are three red roses. Yes, only three red ones. Are there any white ones? Yes, I think so. Where are the white ones? They are in the vase over there. O yes, so they are. There are two white roses. How pretty they are!

「The English Echo」に載っている文章は全て、生徒と教師が交互に読むようにできている。序章によると、生徒が言葉の意味がわからないと、どこに止まったらいいかわからないので、生徒の理解を確認するためにも使えるという。ナオミがリーダーを上手く読めるとすれば、彼女は単に発音を真似しているのではなくて、ある程度その意味もわかっているということになる。なお、彼女は対話が上手く出来ることは示唆的であろう。

これに比して、神田乃武の「Intermediate English Grammar」はまるで数学の教科書のように構成されている。

II. The Participle

Definition--The participle is a verbal partaking of the nature of the adjective.

故ニ verbal adjective*ニ名称ナラル。

Present.	Past.	Perfect.
----------	-------	----------

Doing	done	having done.
-------	------	--------------

Speaking	spoken	having spoken
----------	--------	---------------

I saw a foreign lady walking with her children.

They carried a soldier wounded in both legs.

He is gone there. (アンノロく行ッテナル).

They are come. (来テナル).

I am very tired. He seemed much pleased.

The man, having done his work, went home.

The rising sun : a running stream : a dying man : a

printed letter : the long-expected news.

“Have or Get + Noun or Pronoun (Objective Case) +
Past Participle.”⁽⁹⁾

解釈は英語と日本語をどちらも用いる。これは譲治が考える英語の正しいあり方である。すなわち、抽象的な問題として、英語博士が著書の形で集めた組織的な知識である。そうした知識に興味をもたないナオミは侮られる。

たとえば譲治は彼女に対して「ハリソンさんが伶俐だなんて云つたつて、僕はちつともさうは思はないよ」(五三頁)と揶揄する。その後に、慶應の学生たちとのダンス練習の場面にも、譲治の考え方が鮮明に描かれている。

「あの夫人は日本語が分るのでせうか？」

私がさう云つて尋ねたのは、実はさつきからそれが気になつてゐたからでした。

「いや、日本語は殆ど分りません、大概英語でやつてゐますよ」

「英語はどうも、……スピーキングの方になると、僕は不得手だもんだから……」

「なあに、みんな御同様でさあ。シユレムスカヤ夫人だつて、非常なブローケン・イングリッシュで、僕等よりひどいくらゐですから、ちつとも心配はありませんよ。それにダンスの稽古なんか、言葉はなんにも要りやしません。ワン、トウウ、スリーで、あとは身振りで分るんですから。……」(七八頁)

この稽古の場面に、英語のネイティブがいなければ、譲治が考える理想的な英語を得ている者は一人もない。たとえ自分の英語が間違つていても、それは単なるコミュニケーションの手段であつて、恥ずかしく思つたりする必要はどこにもない。しかし譲治にとつては英語は道具でもなければ、勝手に使えるものでもない。たとえ自分の英語の正解不正解を判断できる外

的権力がなくても、譲治はその権力を恐れる。

そして自分とは違って、英語を自由に使う人に対して譲治は違和感を露呈する。たとえば英語交じりの日本語を喋る婦人の「奇妙なアクセント」に違和感を示す。

「あなた、失礼でございますけれど、ダンスのお稽古をなさいますのは、フォイスト・タイムでいらつしやいますの？」

その縮れ毛はすぐに私を掴まへて、こんな風にしやべり出しましたが、「フォイスト・タイム」と云ふところがいいに氣取つた発音で、ひどく早口に云はれたので、

「は？」

と云ひながら私がへどもどしてゐると、

「え、お始めてなのでございますの」

と、杉崎女史が傍から引き取つてくれました。

「まあ、さうでいらつしやいますか、でもねえ、何でございますわ、そりやジエンルマンはレディーよりもモー・モー・デイファイカルトでございますけれど、お始めになれば直きに何でございますわ。……」

此の「モー・モー」と云ふ奴が、又私には分りませんでした。だが、よく聞いて見ると、*more more* と云ふ意味なのです。「ジエントルマン」を「ジエンルマン」、「リットル」を「リルル」、総べてさう云ふ発音の仕方で話の中へ英語を挟みます。そして日本語にも一種奇妙なアクセントがあつて、

三度に一度は「何でございますわ」を連発しながら、油紙へ火がついたやうに際限もなくしやべるのです。(八〇頁) 野崎欲も二人の英語感覚の違いを比較している。

文法におかまいなく、*"I going" "He making"* の類の破格を犯して恥じないナオミが示すのは、外国語とのまったく異なる付き合い方である。なるほど、河合とナオミが始めて出かけていった「カフェ・エルドラド」でのダンスパーティーでは、ナオミは見事に馬脚を表してしまふ。外人にダンスを申し込まれ、「早口にべらべらと」しゃべられると、「彼女の英語では咄嗟の際に一言も出て来ないのです」。照れ隠しに笑いを浮かべるしかないその態度は、河合と大差のないものである。とはいえ、物語の終わりごろになると、「実地に付き合っているうちに自然と上達した」ものか、「夜会の席で婦人や紳士に愛嬌を振りまきながら、べらべらまくし立てる」(p.31) だけの英語力を身につけているのだから、結局、文法を気にする必要などない、ナオミさんは「今にきつと巧くなります」(p.36) というミス・ハリソンの意見は見当違いではなかったのである。⁽¹⁰⁾ 河合譲治がナオミをはじめとするダンスメンバーの適当な英語に対して抱く不満は、ある意味で研究者と評論家が谷崎の《西洋》に向ける批判に通底するところがあると言えよう。「痴人の愛」に描かれたものを《西洋》に比較する意味はあるのであろうか。ナオミが教科書に書かれた体系的な英語を気にせずに

英単語を手当たり次第に利用することでコミュニケーションすると同様に、作者がここで提示するのは体系的な〈西洋〉ではなく、〈西洋〉に関連付けられる様々な要素をも含む異種的な文化である。

「痴人の愛」における括弧付きの〈西洋〉なるものは、ナオミの身体に端的に現れる。たとえば譲治はナオミが「西洋人の前へ出て恥ずかしくないようなレディーになつてほしい」と言っている。

——此の「西洋人の前へ出て」とか、「西洋人のやうに」とか云ふ言葉を、私はたび／＼使つたものです。彼女もそれを喜んだことは勿論で、

「どう？　かうやるとあたしの顔は西洋人のやうに見えるかい？」

など、云ひながら鏡の前でいろ／＼表情をやつて見せる。

(四三頁)

中谷元宣が指摘するように、譲治は「ナオミの〈名前〉・〈顔だち〉・〈体つき〉といった外見を、〈大そう惻巧さう〉な〈西洋人〉のようだと評価した」が、彼女は「混血児」に似ていると言われると、

憤慨しなかったところを見ると、譲治の内部では〈西洋人〉と〈混血児〉の概念の区別がなく、むしろ喜びながら「そりやさうだらう、第一お前の名前からして変つてゐるもの、ナオミなんてハイカラな名前を、誰がつけたんだね」と

言い、ナオミが《社会》から受けた〈混血児〉という客観的評価の内実を考慮しない。

このことである。しかし最初から譲治はナオミを西洋人ではなく、何か新しい存在にしようとしていることが明らかである。たとえばナオミの服を探している場面で、譲治は「日本ともつかず、支那ともつかず、西洋ともつかないやうな、何かさう云ふなりはないかな」(四四頁)と言う。

内藤千珠子はナオミが示すものを鋭く指摘する。

『痴人の愛』において、二元化されたものの対比が、そのまま二層化する階級の比喩に置き換えられる構図を確認することは容易い。女と男、日本人と西洋人、下層階級と富裕な中産階級あるいは上流階級、無知な労働者階級と教養ある知識階級、醜さと美しさ、不潔と清潔、客体として語られるナオミと語る譲治という主体、あるいは都市論的なアプローチをとるならば、田舎の伝統の論理と都市的ハイカラな論理といったように、数えあげればきりが無い。二項が対置させられたとき、その対関係には上下が附与され、小説テクストのなかには、諸々の階級の重層化した差別構造が派生してゆく。(略)さらに、邪悪な娼婦でありながら聖なる女神でもある、という二律背反を抱えもつた存在として定位されてきたナオミが、下層階級出身でありながら高貴で、しかも「日本人」でありながら「西洋人のよう」であり、加えて「女らしく」もあるが「男らしく」もある

と語られているのを読めば、二元化されたテキストの構図に宿るのは、単なる階級化の力学ということだけではなく、階級化を含んだ二律背反が、両義的なものとして同時に含みもたれる、というしかけであることがわかり、ナオミという記号は、ほとんど図式的とさえみえるほど、二律背反を含みもった両義性そのものを体現しているということになるだろう。

「痴人の愛」も、描かれているのは〈西洋〉と呼ばれているものではなく、両義性自体、つまり文化と文化の間のあるものと言えらるう。

三 「痴人の愛」における断片的な美

以前に上げた松本鶴雄の論は、「痴人の愛」における美学を評価する際に、それ以降の谷崎特有の美学が見出されないと判断する。

『痴人の愛』は関東大震災の翌年、つまり大正十三年に大阪朝日新聞に連載され、後半は雑誌『女性』に書き継がれて同十四年七月号で完了した。大震災と同時に東京を脱出し関西に作者が居住してから半年後の大作である。しかし後年関西にはからずも永住し、古い日本の美の探求に赴いたこの作家の特徴はこの作品にはまだどこにも具体的な萌芽を見いだすことが不可能なのである。⁽¹²⁾

しかし「痴人の愛」の後半に用いられる修辞法には、「陰翳

禮讃」をはじめとするいわゆる〈日本回帰〉作品群に見られる美学の前触れが窺われる。たとえば舞踏会の場面に、譲治がナオミに向ける眼差しは、「陰翳禮讃」において説かれる女性美と一致している。

可愛いダンスの草履を穿いた白足袋の足を爪立てて、くるり／＼と身を翻すと、華やかな長い袂がひら／＼と舞ひます。一步を踏み出す度毎に、着物の上ん前の裾が、蝶々のやうにハタハタと跳ね上ります。芸者が撥を持つ時のやうな手つきで熊谷の肩を摘んでゐる真つ白な指、重くどつしり胴体を締めつけた絢爛な帯地、一茎の花のやうに、此の群集の中に目立つてゐる項、横顔、正面、跡の襟足、——かうして見ると、成る程和服も捨てたものではありません。のみならず、あのピンク色の洋服を始め突飛な意匠の婦人たちが居るせるか、私が密かに心配してゐた彼女のケバケバしい好みも、決してそんなに卑しくはありません。

(一一四頁)

ここで描かれているのは断片の美、隠れの美である。もう一つの例を挙げると、ナオミが再び譲治のもとに戻ってから、自分の身体を彼にちらつと見せつける。

かう云ふ風に見せるともなく折々ちらと見せられるナオミの肌の僅かな部分は、たとへば頸の周りとか、肘とか、脛とか、踵とか云ふ程の、ほんのちよつとした片鱗だけではありましたが、彼女の体が前よりも尚つや、かに、

憎いくらゐるに美しさを増してゐることは、私の眼には決して見逃せませんでした。私はしば／＼想像の世界で、彼女の全身の衣を剥ぎ取り、その曲線を飽かずに眺め入ることを余儀なくされました。(二七八頁)

ナオミの身体と譲治の眼差しとの関係を通じて表現される断片的な美はまた、この作品の文章にも表現されている。前半において、プロットは直線的に繰り広がり、時系列に沿って読者に伝えられる。一方、後半においては、プロットの主な筋、すなわちナオミの経緯などの詳細は、譲治からも読者からも隠されているのであり、それは第三者の話によつてのみ示される。ナオミ自身も、この展開に触れている。それぞれの断片的な情報を集め、全体図を作り上げようとする譲治を笑い、次のように断言する。「あたしは何も、譲治さんの好奇心を満足させる義務はないわよ。それほど知りたけりやあたしの跡をつけていらつしやい、秘密探偵は譲治さんのお得意だから」(二七一頁)と言う。

しかしナオミの身体の断片性は、譲治の眼差しから見た外見に限られていない。その身体に潜む文化的アイデンティティも、複数である。舞踏会で下手に「西洋的」なファッションを目指している菊子を見たナオミは、辛辣な評価を言う。

「顔だちだつて、い、事なんかありやしないわ。あんな女を譲治さんは美人だと思ふの?」

「美人と云ふほどぢやないけれども、鼻も高いし、体つき

も悪くはないし、普通に作つたら見られるだらうが」

「まあ厭だ! 何が見られるもんぢやない! あんな顔ならいくらだつてざらにあるわよ。おまけにどうでせう、西洋人臭く見せようと思つて、いろんな細工をしてゐるところはい、けれど、それがちつとも西洋人に見えないんだから、お慰みぢやないの。まるで猿だよ」(二〇五頁)

言うまでもなく、「西洋人臭く見せようと思つて、いろんな細工をしてゐるところ」はナオミ自身のことにも通じる形容である。しかしナオミは自分のことを明確に区別する。

「何だいありやあ、まるで猿だよ」

「あは、ゝ、猿か、猿たあうめえことを云つたな、全く猿にちげへねえや」

「巧く云つてらあ、自分が連れて来たんぢやないか。——ほんたうにまアちゃん、見つともないから注意しておやりよ。西洋人臭く見せようとしたつて、あの御面相ぢや無理だよ。どだい顔の造作が、ニッポンもニッポンも、純ニッポンと来てるんだから」

「要するに悲しき努力だね」

「あは、ゝ、さうよほんとに、要するに猿の悲しき努力よ。和服を着たつて、西洋人臭く見える人は見えるんだからね」

「つまりお前のやうにかね」
ナオミは「ふん」と鼻を高くして、得意のせゝら笑ひをしながら、

「さうさ、まだあたしの方が混血児のやうに見えるわよ」
(一〇九頁)

野崎愼はナオミのこの描き方と谷崎の〈日本〉像との關係を指摘している。

先に「化け物」呼ばわりした女・菊子と同席するなりゆきとなつたとき、河合は彼女が「西洋人形へ京人形の首をつけた」ような異様さではあるが、無理に洋風の作りにならず「そのままにしておけば」実はなかなかの器量の持ち主であることを見て取る。つまり「純日本風」の道を歩みさえすればよかったわけであり、逆に周囲が西洋風一辺倒になりつつあるなかで、そうしたタイプの女性が新たな魅力を放ちうることは、谷崎自身、『痴人の愛』に続く諸作品で明らかにするとおりである。(略) すなわちナオミは、ただ通り一遍の西洋模倣に満足せず、常にさらなる模倣の、コピーの、自己改良の道を目指して突き進んだ。そうした過剰な努力の結果、彼女は日本人であると同時に西洋の婦人でもあるという、混成的アイデンティティを獲得するに到つたのであり、そのことが河合を何よりも喜ばせ、魅了したのである。¹³⁾

その統一されることのない、混成的アイデンティティはナオミの美の中心にある。そして讓治も、最終的には、ナオミのことを統一させることを断念し、何でも許しながら、ありのままの、矛盾したナオミを楽しむようになる。野口武彦は、讓治の

この選択はそれ以前の谷崎の主人公と大きく異なることを論じる。『肉塊』では作者はいまだ、男とは女によって墮落させられる弱小な存在であるといった態の固定した図式をなぞっているが、ここにいたってようやく谷崎はマゾヒズム小説の作家であることを脱却し、いわば人間精神の一含有成分としてのマゾヒズムの意味を問いかけることに成功したのである。(略)『肉塊』の結末では主人公はただ「墮落」するだけだったが、ここでは作者はもう二度とその常套を繰り返さないだろう。讓治は何ことも判断しない。¹⁴⁾

谷崎潤一郎の「西洋崇拜の頂点」と言われる「痴人の愛」における〈西洋〉は「浅薄」と批判されてきたが、その評価を裏付けるのは、作家が目指すべき正しい〈西洋〉の捉え方・描き方が存在するという誤謬であるの言うまでもない。文字通りの意味においても比喩的な意味においても〈西洋〉と〈西洋人〉の表面にこだわる谷崎の理解が「足りない」とすれば、それは〈西洋〉に理解可能な中身があるという本質主義的な論理の帰結である。単に〈西洋〉の表層を断片的に描くことにとどまらず、それぞれの断片を貫くはずの、ある種の秩序をも作中に書き込むことが暗黙的に要求されているのである。

讓治とナオミの英語教育に対する姿勢はこの二通りの考えを演劇化すると言えよう。ただ言葉拾い上げ、それぞれの然るべき文法・關係に注意せずに利用するナオミとは対照的に讓治は体系的な文法や、自分の英語の正誤を判断する外的権力を常

に求める。ところが物語が進み、譲治がナオミの美に屈服するにつれ、その体系的な知識のあり方への執着の緩みが文体のレベルに表れる。

「痴人の愛」は以前の作品に見られる力学と異文化の混在を保ちつつも、文化・言葉・映像の断片にある、断片ならではの美学を導入する。その意味において異文化交流と、見え隠れする断片の美学を重ねるこの作品は、それ以前の「魔術師」などの作品に見られる論理と、以降の「陰翳禮讃」などの提示される美学との接点として読めると言えよう。

注

※本稿における本文の引用は『谷崎潤一郎全集』第一〇卷（一九八二年二月二五日）に拠る。

- (1) 中村光夫「谷崎潤一郎論」(河出書房 一九五二年一〇月二五日)
- (2) 駒尺喜美「痴人の愛」(「国文学 解釈と鑑賞」四一一二 一九七六年一〇月)
- (3) 谷田昌平「作品論」(『「痴人の愛」』(「国文学 解釈と鑑賞」二二一七 一九五七年七月)
- (4) 松本鶴雄「痴美神と「近代」の激闘(痴人の愛)」(「国文学 解釈と鑑賞」四一一二 一九七六年一〇月)
- (5) 前田久徳「痴人の愛」試論——主題と方法の背反——(「国語と国文学」五七一 一九八〇年一月)
- (6) 山口政幸「痴人の愛」の「西洋」——幸福の指数として——

〔日本近代文学〕三七 一九八七年一〇月〕

- (7) 日高佳紀「サラリーマンと女学生——「痴人の愛」における〈教育〉の位相」(『谷崎潤一郎のディスコース——近代読者への接近』所収 双文社出版 二〇一五年一〇月一五日)

- (8) Bryan, J. Ingram. The English Echo for Middle Schools in Three Volumes: A Text-Book of Spoken English to Teach Conversation. Book 1. Tokyo: Maruzen Company, Ltd. 1915.

- (6) Kanda, Naibu. Intermediate English Grammar. Tokyo: Sanseido, 1900.

- (10) 野崎敏「痴人の愛」と外国語のレッスン」(『谷崎潤一郎 境界を超えて』所収 笠間書院 二〇〇九年二月二八日)

- (11) 中谷元宜「痴人の愛」の構造——〈混血児〉としてのナオミと譲治の《社会》意識をめぐって——(『大阪教育大学国語と教育』二二三 一九九八年三月)

- (12) 松本鶴雄「痴美神と「近代」の激闘(痴人の愛)」(前掲)

- (13) 野崎敏「痴人の愛」と外国語のレッスン」(前掲)

- (14) 野口武彦「小田原事件と『痴人の愛』」(『谷崎潤一郎論』所収 中央公論社 一九七三年八月二五日)

(ぐれごりー・けずなじゃと／本学地球社会共生学部助教)